

—第202次

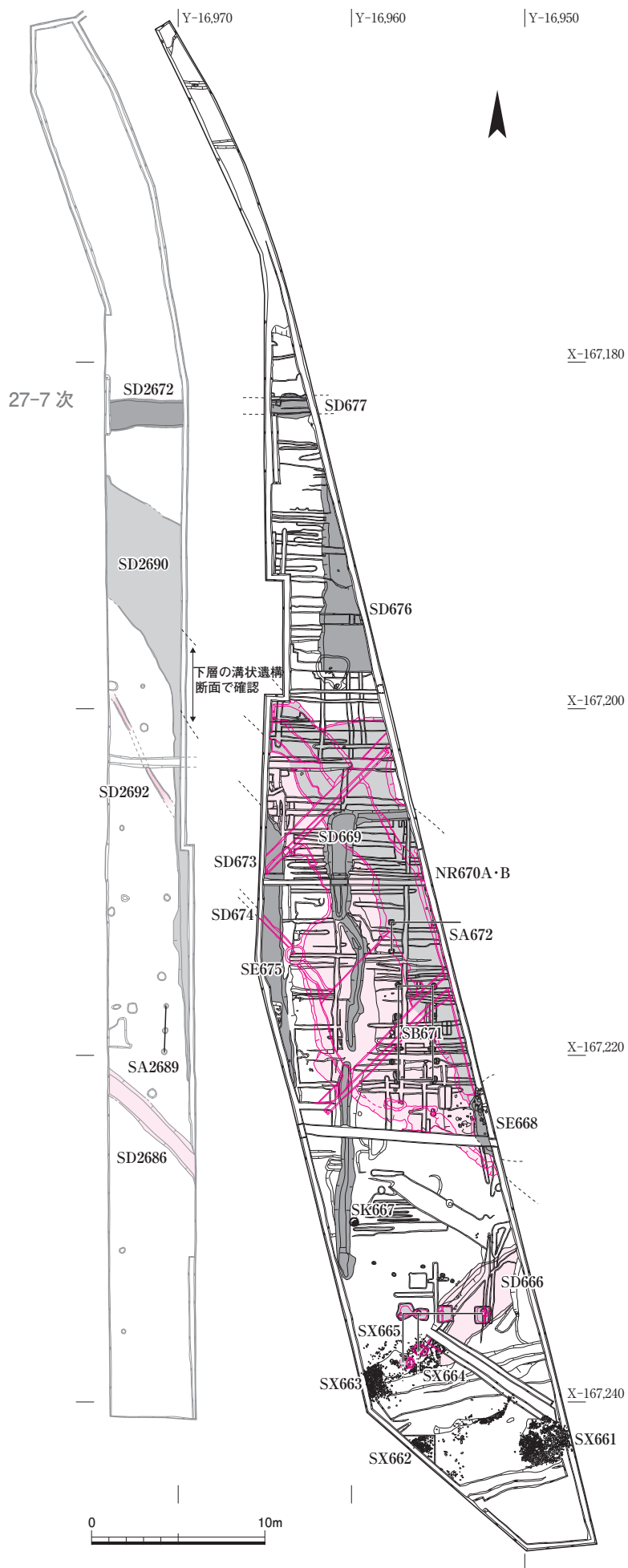


図127 第202次調査区遺構図 1 : 350

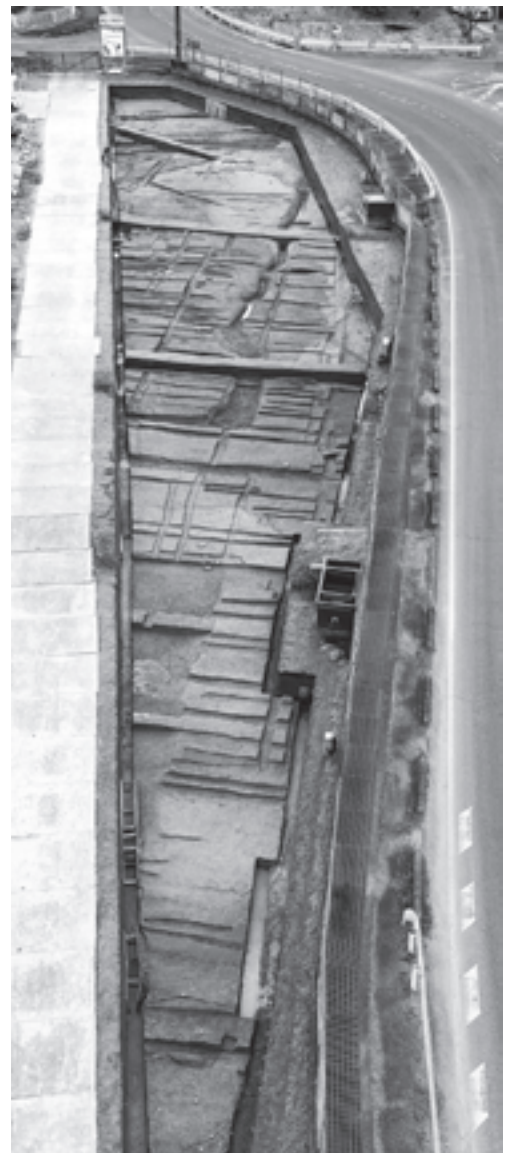


図128 第202次調査区全景（北西から）



図129 NR670B完掘状況（南東から）



図130 SE675完掘状況(東から)

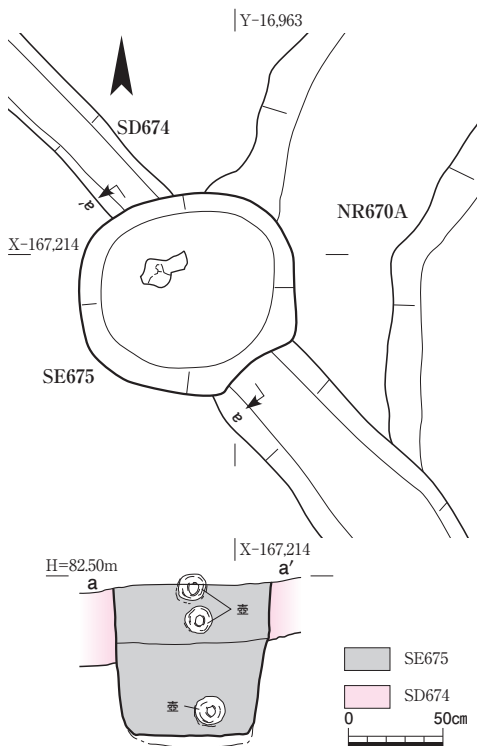


図131 SE675遺構図・断面図 1 : 40

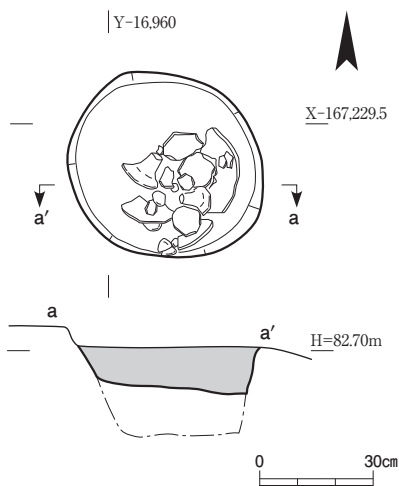


図132 SK667遺構図・断面図 1 : 20

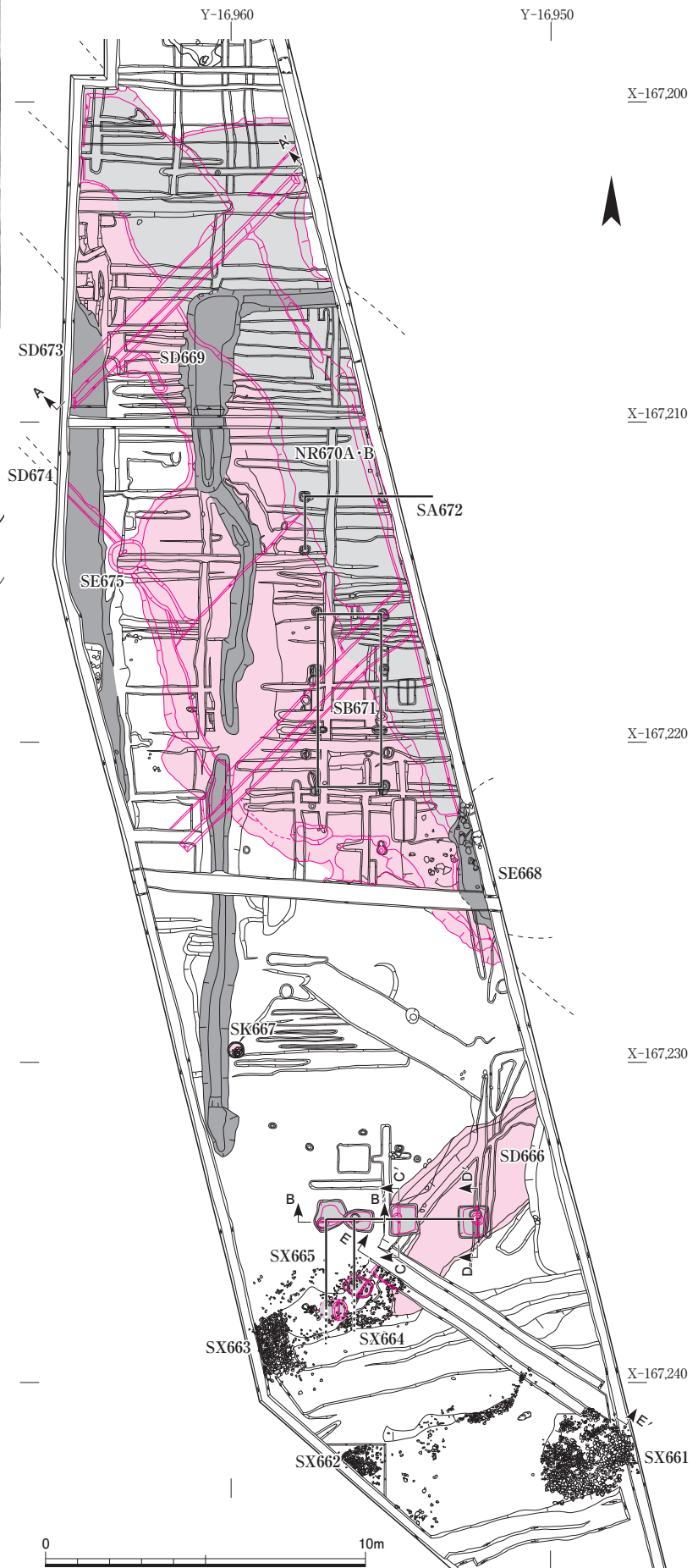


図133 第202次主要遺構図 1 : 200

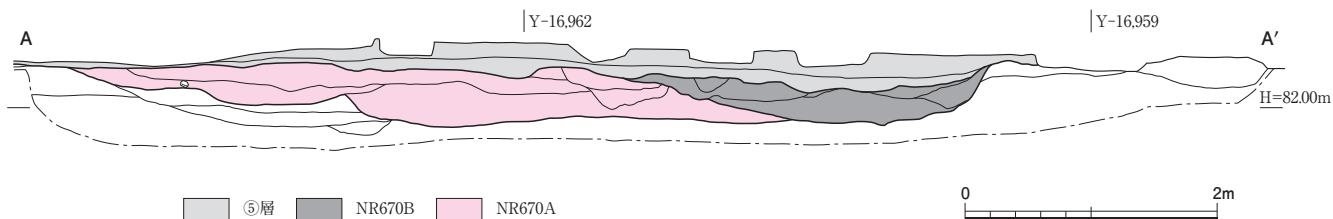


図134 NR670A・B断面図 1:60

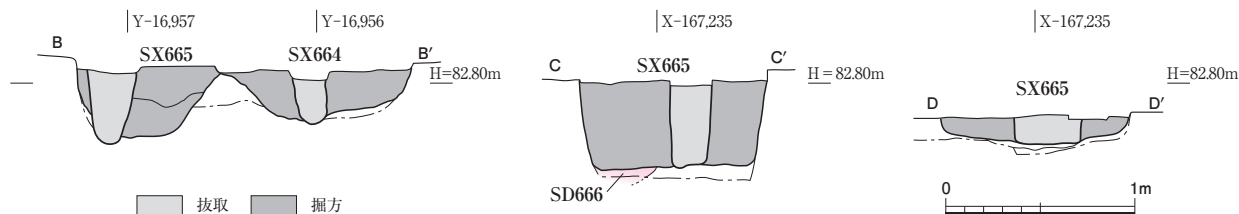


図135 SX664・665断面図 1:40



図136 SD666、SX664・665検出状況(東から)

査区東辺を北流し、その後北西に向きを変える(図127、『藤原概報 10』)。SD2690がNR670A・Bと一連の溝とすれば、北流部分が合致しない。このことから、SD2690とNR670A・Bは別の溝である可能性がまず考えられる。ただし、別の溝とした場合、NR670A・Bの本調査区西方、およびSD2690の第27-7次調査区東方への延長がどうなるかが問題となる。

ここで注目されるのは、第27-7次調査の東壁土層においてSD2690の下層に幅4.7m、深さ0.6m以上になる溝状の遺構を検出していることである(図127)。この下層の溝状遺構はX=-167,200付近にあり、NR670A・B

とも位置的には合致する。この下層の溝状遺構が本来はNR670AもしくはBと一連の溝である可能性も考えられる。そうであるなら、SD2690自体は⑤層のような一帯を平坦にする整地層という理解も成り立つ。実際、SD2690の深度は10~30cmと比較的浅く、検出面の高さや層の厚さ、遺物が大量に含まれる点も⑤層と共通する。いずれにせよ、今回の調査成果だけでは断定はできない。ここでは上記の2つの可能性を考えておきたい。

弥生時代以前

井戸SE675 調査区中央で検出した素掘りの井戸。⑤層を掘り下げた⑥層上面で検出した。自然流路NR670A西辺と斜行溝SD674を掘り込む。直径1.1m、深さ0.8m。井戸は一度に埋め立てられたとみられ、弥生時代後期の完形の長頸壺が埋土上層で2個、下層で1個、いずれも横倒しの状態で出土した(図130・131、図138-1~3)。井戸を埋める際に人為的に置いたとみられる。

斜行溝SD674 調査区中央、⑥層上面で検出した南東-北西方向に斜行する溝。幅0.3~0.6m、深さ0.2~0.4m。NR670Aより新しく、SE675よりも古い。第27-7次調査で検出した弥生時代の斜行溝SD2692の延長にあたる可能性がある(図127)。

斜行溝SD666 調査区南で検出した南西-北東方向に斜行する溝(図136・137)。⑥層で検出した。幅3.1m、深さ0.5m。溝の両端は平安時代以降の洪水や削平によって失われている。埋土には弥生土器を含む。

土坑SK667 調査区やや南寄りで検出した小型の土坑。⑥層で検出した。直径0.5m、深さ0.2m。埋土から弥生後期の土器が多く出土した(図132)。

古 代

柱穴列SX665 調査区南で検出した南北および東西方向の柱穴列(図135・136)。掘方・抜取穴からは遺物は出

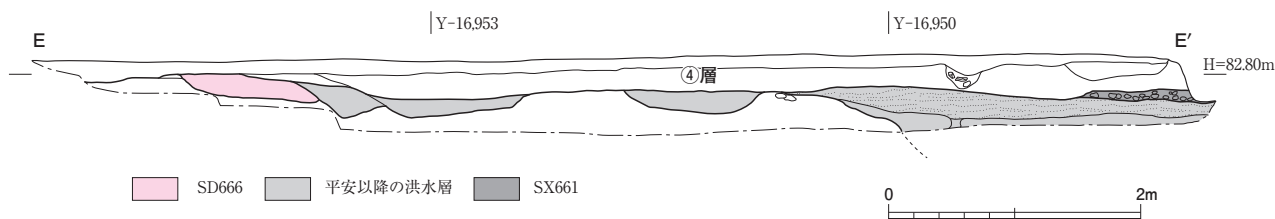


図137 SD666・SX661土層図 1:60

土しなかったものの、柱穴の規模や形状から古代と判断した。⑥層で検出し、SD666を掘り込む。SX664と重複関係があり、SX665のほうが古い。柱間寸法は2.4m（8尺）。東西2間、南北1間を検出した。掘方は角丸方形で幅約1.0m、深さ0.2～0.5m。柱穴列はさらに南や東に延びて建物になる可能性があるが、調査区南部が平安時代以降の洪水によって南東方向に大きく削平されているため、確認していない。

柱穴列SX664 調査区南で検出した南北方向の柱穴列（図135・136）。柱穴列SX665より新しい。柱間寸法2.1m（7尺）で、1間分検出した。掘方直径0.9m、深さ0.4m。柱穴列は南に展開する可能性があるが、洪水による削平により、確認していない。また、掘方・採取穴から遺物は出土しなかった。

中世以降

礎敷SX661・662・663 調査区南で検出した礎敷。5～20cm大の中礎・大礎を無造作に敷き詰めている。礎の間から中世の土釜などが出土した。石敷の下層は平安時代以降の洪水層が堆積しており（図137）、軟弱な地盤を改良するための地業とみられる。

掘立柱建物SB671 調査区中央、④層上面で検出した南北棟建物。桁行3間、梁行1間で柱間寸法は1.8m（6尺）。掘方直径0.4m、深さ0.4m。

掘立柱塀SA672 同じく調査区中央、④層上面で検出したL字状に屈曲する掘立柱塀。南北、東西それぞれ1間分検出した。柱間は南北が1.8m（6尺）、東西が2.1m（7尺）。掘方直径0.3m、深さ0.2m。SB671にともなう目隠し塀の可能性がある。

井戸SE668 調査区やや南寄りの東辺で検出した石組み井戸。径4.0m、深さ0.4m。井戸は大部分が壊されており、石組の最下面だけが一部残る。掘方からは、13世紀後葉から14世紀にかけての土器が出土した。

溝SD669 X = -167,232から北に流れ、X = -167,206付近で東に向かってL字状に屈曲する溝。幅1.0m、深さ0.5m。断面はV字形を呈する。X = -167,220付近で約0.7mにわたりとぎれ、陸橋状になる。SB671を取り囲

む溝の可能性がある。

南北溝SD673 SD669から約2m西の調査区西辺で検出した溝。西肩は調査区外となる。幅1.2m以上、深さ0.2m。X = -167,213付近で北西に向きを変える。

南北溝SD676 調査区北寄りで検出した溝。西・南方の一部のみ検出し、それぞれ調査区外の北方、当方に延びる。幅3.0m以上、深さ0.3m。SD669のように東に向かってL字状に屈曲する溝となる可能性がある。

東西溝SD677 調査区北で検出した溝。幅1.4m、深さ0.3m。第27-7次調査で検出した東西溝SD2672の延長にあたる可能性がある（図127）。

4 出土遺物

瓦磚類 第202次調査区からは、軒平瓦1点（6661B）、丸瓦44点（3.6kg）、平瓦206点（22.2kg）、面戸瓦2点、熨斗瓦1点が出土した。大半が中世の包含層である④層から出土しており、遺構にともなうものはない。6661Bは大官大寺所用の軒平瓦である。このほかにも少量の中近世の瓦が出土した。

（石田由紀子）

土器 第202次調査区からは、コンテナ24箱分の土器が出土した。縄文土器小片、弥生土器後期から古墳時代前期の土器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・瓦器などが含まれる。

弥生時代後期の土器は、甕、長頸壺、直口壺、二重口縁壺、高杯などが出土した。図138-1～3はスタンプ状の底部を有する長頸壺。いずれも井戸SE675から出土した。1・2は頸部・体部ともにタテミガキし、底部周辺はタテミガキに先立ってタテハケを施す。3は頸部を縦方向のヘラナデ、体部をタテミガキする。3の頸部内面には輪積痕が連続的に残る。なお、西隣の第27-7次調査区で検出した斜行溝SD2686からも、甕、長頸壺、高杯などの弥生土器がまとまって出土した。古墳時代前期の土器は僅少な上にいずれも小片であり、布留型甕の口縁部や小型器台の脚部片がみられた。

古代の土器は、主に藤原京期の整地層である⑤層から出土した。土師器は、杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、

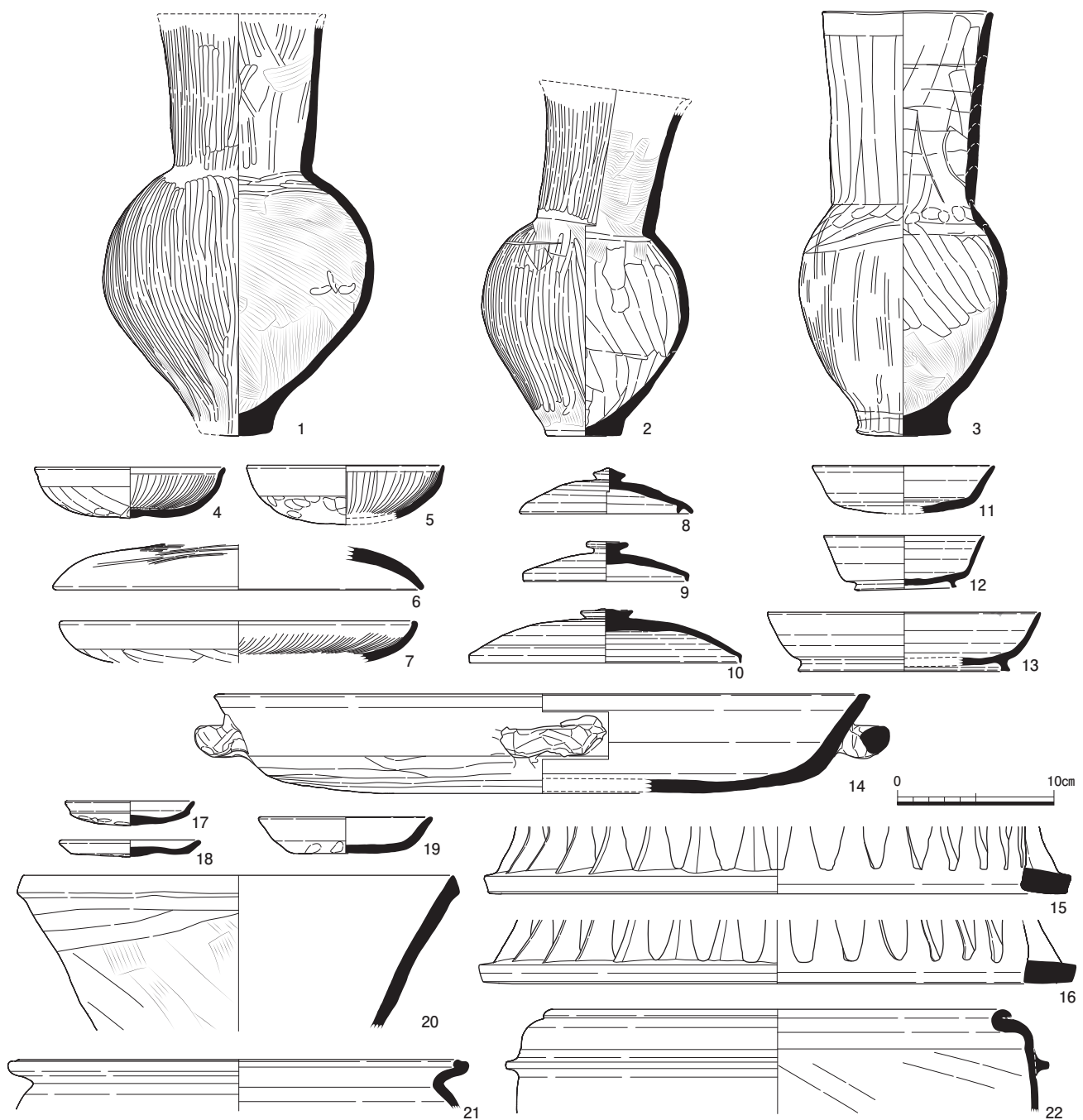


図138 第202次調査出土土器 1 : 4

杯H、皿A、皿蓋、鉢H、碗C、高杯、甕、竈片などがあり、須恵器は、杯A、杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、杯H、杯H蓋、鉢A、盤、平瓶、壺蓋、甕B、甕Cなどを含む。これらの土器群は、概ね飛鳥Ⅳ～Ⅴに属する。図138-4～7は土師器。4・5は杯C。4は底部内面に螺旋暗文、外面にヘラケズリを施す。6は皿蓋。頂部にわずかにヘラミガキが残る。7は皿A。底部外面をヘラケズリする。8～14は須恵器。8はかえりをもつ杯蓋。9・10はかえりをもたない杯蓋。10は作りが良く薄手であり、尾張産と考えられる。11は杯A。底

部外面はヘラ切り後に軽くナデ調整。12・13は杯B。13の口縁端部内側には部分的に煤痕が付着し、灯火器としての利用を示唆する。14は盤。口縁部外面下に平面台形の環状把手が取り付け。底部内面にはナデにより擦り消された同心円状当て具痕が一面に残る。上記に加えて、中世の包含層である④層などから蹄脚円面硯の蹄脚部2点(15・16)と圈足円面硯aと思しき外堤部小片1点が、また、⑤層などから土馬の小片5点が出土した。

中世の土器は、井戸SE668および④層から主に出土した。土師器皿と土釜がとくに顕著にみられ、このほか、

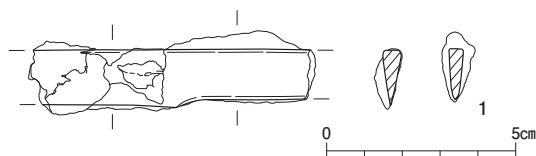


図139 第202次調査出土金属製品 1 : 2

瓦器碗、瓦質深鉢（摺鉢）などが混じる。およそ13～15世紀頃におさまるとされる。図138-19～21はSE668出土。19は土師器皿。口縁部はやや外反し、底部に指頭圧痕が残る。20は瓦質の摺鉢。外面をハケ目調整と横方向のヘラケズリで仕上げる。残存破片の内面にハケ目はみられない。13世紀後葉から14世紀頃までの所産か。21は土釜。菅原正明の分類による大和B型に比定できる¹⁾。17・18・22は④層出土。17・18は土師器皿。いずれも浅手で口径が80～90mmと小さい。なお、旧大乘院庭園で検出した鎌倉時代の土器溜SU8829出土土師器皿（D類）に類品がみられる²⁾。22の土釜は、菅原分類で大和H1型に比定できる。いずれも13世紀頃の所産か。

（山藤正敏）

木製品 自然流路NR670A・Bから、燃えさし、加工木、板材、丸棒などの木製品が少量出土した。

金属製品 図139は中世の包含層である④層から出土した刀子片である。刃側がナデ角関の片関で、身先端と茎尻を欠損する。残存長は7.6cm。

冶金関連遺物 ④層から、鑄の羽口片、銅滓、鉄滓などが少量出土した。

（片山健太郎／総社市）

石器 第202次調査では石器51点が出土した。ここではその1例を図示する。図140は打製石斧。両面に調整剝離を施して撥形とし、両側縁は潰れ気味である。刃部は両面にわたり摩耗が顕著で、使用痕跡とみられる。石材はサヌカイトで、片面から側面にかけて残る自然面は、二上山北麓一帯で採集できる亜円礫のそれに同じ。石理走行は器体に対してほぼ順目である。

（森川 実）

石製品 ④層から基石2点が出土した。

（片山）

5 まとめ

本調査区では、弥生時代後期、古代、中世の遺構を検出した。

特に、自然流路NR670A・Bは弥生時代後期から古代まで位置を替えながら調査区内を北西方向に流れていたことが確認できた。調査区約10m南は、大官大寺の西側を北流してきた中の川が西へと大きく流れを替える地点にあたる。NR670A・Bは、古代以前の中川の旧河道を考えるうえで参考になる。ただし、NR670A・Bが

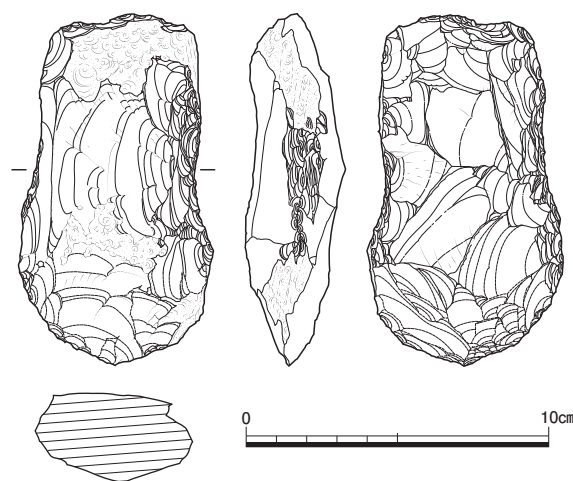


図140 第202次調査出土石器 2 : 5

SD2690と一連か否かは本調査区内では確定しない。

このほかに弥生時代後期の遺構は、井戸SE675や土坑SK667、斜行溝SD674を検出した。また、周辺では、第27-7次調査や耳成線第2次調査でも弥生時代後期の溝や土坑などを検出しており、本調査区周辺には当該期に一定規模の集落が存在したことがうかがわれる。

古代の遺構としては、NR670Bのほかに、柱穴列SX664・665を検出した。SX665は後世の洪水による削平のため一部しか検出できなかったものの、建物になる可能性が高い。また、藤原京期にはNR670Bを埋め立てて、周辺に大規模な整地（⑤層）をおこなうことが判明した。④・⑤層からは藤原京期の大量の土器とともに蹄脚円面硯が出土している。円面硯は第27-7次調査区でも出土しており、SX664・665との関連性は不明なものの、周辺に役所に関わる建物があったとも推測できる。

中世に関しては、掘立柱建物にともなう堀や井戸、区画溝など、居館や集落の存在を示す遺構を検出した。また、調査区南では当該期に洪水による軟弱地盤を礫を敷くことによって改良している。周辺では調査区西に隣接する法然寺が鎌倉時代創建と伝えられており³⁾、中世以降法然寺を中心として周辺が発展していった可能性が考えられる。

このように、道路敷設にともなう限られた面積の調査ではあったが、当該地が弥生時代後期から中世にかけて活発に利用されていた状況があらかになった。（石田）

註

- 1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983。
- 2) 神野恵「鎌倉時代の土器」『名勝旧大乘院庭園発掘調査報告』奈文研学報第97冊、2018。
- 3) 土井實「寺院」『檀原市史』下巻、檀原市役所、1987。